稼ぐ妻・育てる夫

治部　れんげ　著

勁草書房

2940円

本棚から一冊

評　者　早稲田大学大学院教授

川本　裕子

仕事、育児、家庭を社会全体の視点で

熱い夏の総選挙の結果若い議員が増え、女性議員もずいぶん増えて全体の10%を超えた。これで十分かどうかは別として、国の政治が男性優位で年功序列的な体質から、普通の国民の視点に近づく構造になりつつあるように感じる。

新たな政権が一丁目一番地に掲げるのが子育て支援策である。これまで日本では投票率の高い高齢者への目配りはあっても、将来の有権者たる子供達には相対的に大きな関心が向けられず、様々な理屈を付けて実質的には育児支援に真剣に取り組んでなかったのが現実だ。今回公的な資源配分の枠組み変化が起こって、「社会全体で子育てする」政府の姿勢が確立すれば、社会の意識も経済構造も大きく変わるだろう。

子育て政策の議論は、女性の働き方や夫婦の役割分担の実態を踏まえる必要がある。現代の子育ては、女性のキャリアと表裏一体の問題であり、男性の仕事の仕方自体をも問い直す。政権交代を機に大きな転換点を迎えるであろう日本の子育てに大変参考となる本がタイミングよく出版された。

本書は筆者が「日本では男性と同等の知力・能力を備えた多くの女性たちが、男性と同様のキャリアを追求することなくなぜ仕事をやめていくのか」「夫がもっと家事・育児を分担すれば妻は育児をしながら仕事を続けられるのではないか」という問いに解を見出そうと、アメリカの高学歴・専門職の子供をもつ人々へのインタビュー調査を基にして行った研究成果である。子育てをしながら働くカップルが直面する問題、男性の家事分担の意義など具体的に明らかになる。自分を保守的だと思っていない男性が読んでも新しい発見があることは間違いない。

筆者は自分自身のキャリア、子育ての経験にも基づき、仕事と子供と家族の問題を徹底的に考え抜いている。ジャーナリストらしくどんな小さな疑問も放置せず、問題を正面から捉えてごまかさない。ともすれば子育てを個人的な問題として矮小化し、社会で解決しなければならない問題として考えることを逃げてきたこれまでの日本にあって、その筆致はすがすがしい。